

フェスティバル/トーキー実行委員会	
顧問	野村 萬 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師 福原義春 株式会社資生堂 名誉会長 高野之次 豊島区長
名誉実行委員長	阿志グループホールディングス株式会社 相談役
賞委員長	森田 信 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	市村作知雄 豊島区文化工部長 栗原 直 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長 東澤 昭 株式会社資生堂企業文化部長
委員	岡田恭子 株式会社団法人企業メナ協議会 理事長、花王株式会社 顧問 尾崎元規 東京藝術大学音楽学部音楽環境造科 教授 熊倉純子 アサヒビール株式会社社会環境部 部長 小沼克年 東京商工会議所豊島支部 会長 鈴木正美 扇田商店 演劇評論家 永井多恵子 公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長 小澤弘一 豊島区文化工部文化デザイン課長 岸 正人 公益財団法人としま未来文化財団 部長 蓮池奈緒子 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 小島寛大 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事	鈴木さよ子 豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)

ディレクターズコミッティ	
代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横橋応彦

フェスティバル/トーキー実行委員会事務局	
事務局チーフ	蓮原円花
制作	小島寛大、楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、高橋まみ、十万垂紀子、松嶋瑞香、荒川真由子、根橋応彦、小山ひとみ、砂川美穂、松宮俊文、岡山真利恵、横井貴子
広報	楢江紗恵、湯川裕子
企画営業	長原理江
票务	渡邊絵里、穴戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸来
経理	堤久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネーター	佐々木真壽子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター	河川 益(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション&デザイン	河村廣輔
メインビジュアル	二階謙三(SHOHEI×河村廣輔)
ウェブサイト	濱田真一+番松 佑+菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング	李 丞孝
シュリンゲンジーフ特集 企画・コーディネート	ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバル/トーキー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金（国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ Vol.2）
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、J-WAVE 81.3FM
特別協力：西武池袋本店、東京百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チヨコト株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人 豊島法人会、池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファ池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力：株式会社ポスター・ハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京 フェスティバル助成（公益財団法人東京都歴史文化財団）	
平成28年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアティブ（池袋/としま/東京アーツプロジェクト 事業）	
公益社団法人企業メナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業	
フェスティバル/トーキー14は東京クリエイティブワークスと広報連携しています。	
会期：2014年11月（土）ー11月30日（日）	

インター-阿部裕加、入江都美、岡崎由美子、加藤希美、加藤彩、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤麗純、清水千奈美、杉本真理江、高橋雅臣、田中秀穂、田中紗織、田中直子、遠山高江、中村みなみ、萩原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石直輝、福地紗綾、三羊文乃、山ノ下登志子、山口梓那、吉原早紀

ETワール-青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敬子、荒井純香、新井朋行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚幸、大迎美希、大出晴、小川真理子、小山内梓希、小野寺ありす、畑田みずき、加藤千夏、片山悠太郎、桂屋穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七広、児嶋祐佳、小川恵理子、境田博史、佐川達彦、崎濱聖梨、篠彩夏、藤原沙織、島根悠子、霜島桜子、鈴木南、岡島弥生、高橋志穂、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田貴生、照達静香、渡辺航、富永愛香、中根恵美、中川朋子、中村直樹、中村公子、中村光子、根本明美、波田野乃乃、峰谷翔子、林ひろく、平野桃里、胡瀬、藤田さおり、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田祐香、山口侑紀、四浦麻希、吉田美幸、四方田靖子、跡見学園女子大学 曾田ゼミシンカワゼミ

					
豊島区 TOSHIMA CITY	公益財団法人 としま未来文化財団	ANJ NPO法人アートネットワーク・ジャパン Arts Network Japan	ARTS COUNCIL TOKYO		
JAPAN FOUNDATION 国際交流基金	Asahi アサヒビール株式会社	SHI/EIDO			

発行：フェスティバル/トーキー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 TEL:03-5961-5202 http://festival-tokyo.jp/
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキー実行委員会 デザイン：小林 剛（UNA） ※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Executive Committee
Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.
Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.
Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation
Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts
Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.
Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima
Akihiko Senda, Theatre Critic
Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Koichi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Hiroto mo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Directors Committee
Representative: Sachio Ichimura
Deputy Representative: Hiroto mo Kojima
Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori

Executive Committee Office
Administrative Manager: Madoka Ashihara
Production Co-ordinators: Hiroto mo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Luna Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi
Public Relations: Sae Horie, Yuko Yokawa
Sales & Planning: Rie Nagahara
Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Office Assistant: Saki Hirata
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki, Kyoko Yokokawa

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Yukiko Kato
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction & Design: Kosuke Kawamura
Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura)
Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki

Asia Series Programing: Seunghyo Lee
Schlingensief Film Series Programing: Ulrike Krautheim

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chaocott Co., Ltd.
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
PR Support: Poster Hari's Company
Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014 (Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises)
Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)
Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks

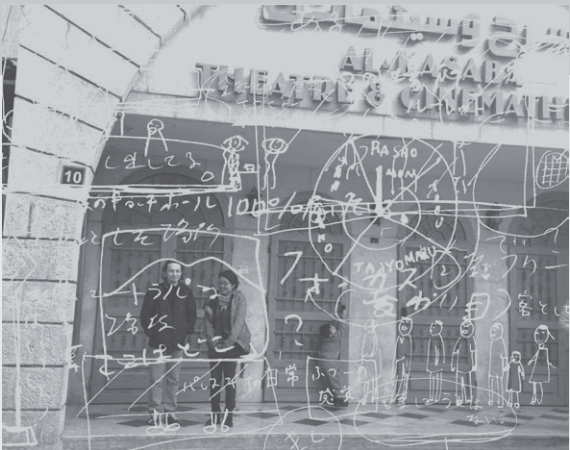
Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014

羅生門 | 藪の中

ジョージ・イブラヒム / (アルカサバ・シアター)

(アーティストック・ディレクター) [パレスチナ] ×

坂田ゆかり (演出) ×目 (美術) ×長島 確 (ドラマトゥルク)



© Mé

Rashomon | Yabunonaka

George Ibrahim (Al-Kasaba Theatre) (Artistic Director) [Palestine] +

Yukari Sakata (Direction) [Japan] + Mé (Stage Design) [Japan] +

Kaku Nagashima (Dramaturgy) [Japan]

11/5 (Web) – 11/9 (Sun)

あうるすぽっと

Owispot Theater

FESTIVAL TOKYO

『羅生門 | 藪の中』に寄せて

ジョージ・イブラヒム(アーティストック・ディレクター)

『羅生門』の脚本を初めて読んだのは1975年のことです。芥川龍之介の短編をもとにフェイ&マイケル・カニンというアメリカ人作家が書いたその作品が表現していた深い人間性と哲学は忘れることができません。羅生門は真実へ向けた出発の門です。しかし、間違いと正解、真実と虚偽、事実と嘘は常に絡まり合っていて、真実に到ることは難しい。真実は、さまざまな人びとの考え、信条や気持ち、環境や境遇の違いといったものによって定義されるのです。(アメリカ版の脚本に登場する)髪屋の言葉のように、「人間は見たいものを見るし、聞きたいことを聞く」のです。

思えばこの脚本は、長年、私のオフィスの「その他」の棚で出番を待っていました。私と東京の友との繋がりによって、今年のフェスティバルトーキョーでこの作品は完成を見ます。日本で制作、発表するために、私は新たに頭に浮かんだ『羅生門』のイメージと、日本の演出家とパレスチナの俳優という組み合わせにすべきだと提案しました。日本の制作チームと俳優たちは、ミーティングや共同作業を通じて、日本とパレスチナの大衆的な伝統を知ったり、地理的には遠いながらも共通する文化があることを知るにつれ、打ち解けていきました。場所に関係なく人は同じであり、必要とするものや、恐れていることは一つであって、ただ経験と暮らしに違いがあるだけなのです。私は東京の仲間たちが、パレスチナ俳優との座組に賛同してくれて、とても嬉しかったです。私の最初の提案を温かく受け入れてもらったからこそ、私たちは仕事に取り掛かることができたのです。

制作の千佳、演出のゆかり、ドラマトゥルクの確とはパレスチナで初めて顔を合わせ、とても興味深く実り多い対話をしました。若者たちと自分……老人

(?)の年の差による認識の違いはあったとしても。そしてここでの真実は、若き演出家のゆかりとこれまた若きドラマトゥルクの確の、目を見張るようなすばらしい見解の中に見出されました。この時のミーティングの最後に、私たちはテキストを芥川の書いたものに戻すことに決めました。アメリカの作家夫妻が用意した脚本を忘れて。そして友人たちは日本へ帰り、メールでやりとりをしながらいっしょにテキストの準備作業を続けました。

彼らと2度目に会ったのもパレスチナでした。キャストやテクニカルスタッフを選び、テキストの探求と試行錯誤の旅へ出ました。音楽と装置を選び、配役を決め、最終版、つまり今回実際に上演されるものに到達したのです。

私たちのこの選択が成功することを祈っています。この選択はパレスチナの文化と、それとはまったく違う日本の文化との、人間的な出会いの中でみられたものなのです。

最後に、この場を借りて、日本で尽力してくれたスタッフに感謝を述べたいと思います。とくに演出のゆかり、ドラマトゥルクの確、そして制作の千佳。また相互理解と打ち合わせに不可欠な日本語とアラビア語の通訳として、すばらしい努力をしてくれた真帆にもとりわけ感謝しています。

(翻訳=橋本琴音)



ジョージ・イブラヒム
1945年生まれ。アルカサバ・シアター&シネマテークの創設者、ディレクター。俳優としてのキャリアを積み、ヘブライ大学にて演劇を学んだ後、劇作家・演出家として活躍。代表作に『Ramzi Abu Al Majid』(1995年カルタゴ国際演劇祭ベスト俳優受賞)、『Immigrant』(1999年カルタゴ国際演劇祭ベスト演出家賞及びベスト衣裳賞受賞)など。『アライフ・フロム・パレスチナ-占領下の物語-』(2004、11年)、『壁-占領下の物語II』(2005年)で来日。

鼎談

坂田ゆかり(演出)×目(荒神明香、南川憲二/美術)



——本作で、坂田さんは演出、「目」の皆さんは舞台美術を担当されています。今回が初顔合わせだそうですね。

坂田 はい。今年2月にパレスチナで最初のミーティングをアーティストック・ディレクターのジョージ(・イブラヒム)と行った際に「美術はぜひ日本人にお願いしたい」と提案されました。1959年にニューヨークで上演された『Rashomon』が黒澤明の映画に基づいていたのも大きな理由だと思いますが、美術のプランは作品コンセプトに大きく関わるので、物理的に距離の近い日本で密に話し合えるようにとの配慮に感謝しています。

南川 依頼をいただいた時はテンションが上がりましたよ(笑)。芥川龍之介の『羅生門』と『藪の中』って『今昔物語』を下敷きにしているんですよね。つまり「今は昔」の作品ってことで……。

坂田 『今昔物語』の冒頭の「今は昔」というフレーズは、考えてみれば「現在イコール昔」で、かつ「昔イコール現在」という意味ですよ。「(このフレーズがあれば)一気に時間を超えられるよね!」っていう話で盛り上がりまして。

南川 古典の『今昔物語』があって、芥川の小説があり、黒澤監督が映画化して、それがきっかけになってブロードウェイで舞台になった。さらにその戯曲をパレスチナ出身のジョージが注目して、それが今回の作品につながっている。時間や国を超えて共有される感覚や知覚は、僕ら「目」にとっても興味のあることなんです。

坂田 パレスチナ人の俳優がアラビア語で上演する作品ですから、どうしても最近の中東情勢と結びつけて受け取られてしまいますよね。でも、私はパレスチナや日本の固有性から離れて、もっと普遍的なところに作品が辿り着けないだろうかと思っています。

——8月に2度目のパレスチナ滞在をされていますが、その最中に街が喪に服していたそうですね。ガザ地区では空爆が続き、坂田さんたちが滞在していた西岸地区のラマッラーでもイスラエル軍との衝突でパレスチナ人青年が射殺された。そのような体験を経てもなお、作品は普遍性を保てるでしょうか。

坂田 もちろん衝撃は受けました。でも、現地での稽古では毎日最初に俳優一人ひとりの長い自己紹介を行ったんですね。それこそ、それまでの人生を吐露するような。出身地のこと、家族のこと……。第3次中東戦争以降のイスラエル占領下に生まれ育って、俳優になって。その中には殉死以外にもさまざまなエピソードがあるわけで、ショッキングな出来事だけを語ることは避けなければいけないと思いました。

南川 作品の冒頭にも自己紹介シーンがありますよね。通し稽古で見ただけですが、とても印象的でした。ストーリーの本筋と直接関係しているわけではないのに、人柄や人となり伝わってくると、言葉の通じないはずのパレスチナの俳優たちに親近感が湧いてくる。

荒神 しかもキャラクターがみんな立っていて。

南川 『ドラゴンボール』の登場人物みたいだったよね(笑)

世界を見出す感覚

—「目」が舞台美術に挑戦するのは今回が初めてですが、坂田さんからはどんなオーダーがあったのでしょうか。

荒神 それがほとんどなかったんですよ。プランと一緒に考えながら制作を進めていくスタイルでした。

坂田 美術家に舞台美術をお願いしたいというのは、私からのリクエストで。今回のような多層的な作品の場合、価値観の衝突から生まれる発見や、お互いの関心事の一致から得られるものは大きいだろうと思っていました。

荒神 パレスチナ問題を扱う作品だと聞いて、じつは私たちもかなり身構えていたんです。でも坂田さんから話を聞いていくうちに変わっていった。『羅生門』は具体的な門についての話ですけど、

『藪の中』はかなり抽象的な世界観を扱っている。実際、坂田さんとドラマトルクの長島(確)さんが、京都に行って羅生門の跡を訪ねたり、劇中に登場する山を登ったりしたという話も伺いました。

坂田 『藪の中』では、武士の夫婦が山道で盗賊の多襄丸に出会うんですけど、その道が実在の旧東海道なんです。それで長島さんと私がそれぞれリサーチに行きました。

—登場人物の足取りを追うようなリサーチですね。夫婦と多襄丸みたいに途中で出くわしたり？

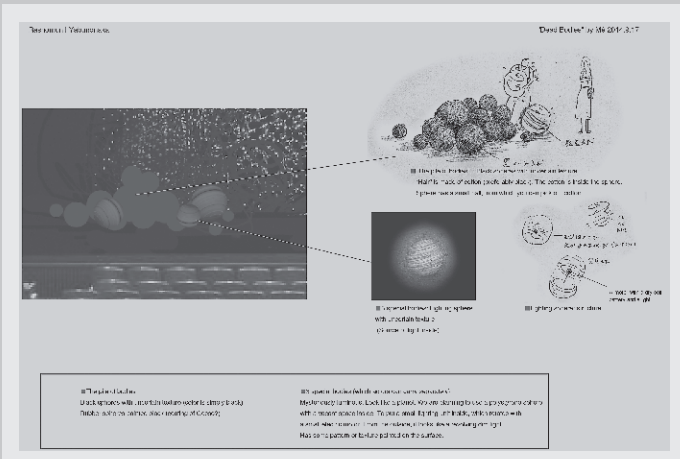
坂田 ところが歩いたのは別の道だったんです(笑)。私がどンドン藪の中に突き進んで行ったせいで迷ってしまっ。

荒神 そのプロセスを聞いていて「夫婦と多襄丸は、本当に同じ山を越えていたのか?」とか、ふわっと疑問や謎に包まれていく感じがして。

南川 坂田さんが「藪はどこでもない場所だ」と

おっしゃっていて、その曖昧な感覚が、この作品が目指す場所だと気づいたんです。不可解なものが最上位の概念であって、それを人間がどのように受け入れるかがテーマなんだと。

坂田 それで提案していただいたのが、色とりどりのビーズがカーテン状に垂れ下がっている案でしたよね。二度目のパレスチナ滞在の時にイメージ画像が届いて、俳優たちも含めて全員が「いいね!」って興奮していました。ところが日本に戻って実物を見たら、また違うものになっていて。



本作の美術プラン

南川 ビーズがピンポン玉大のサイズに変わっていて、びっくりしたでしょう(笑)。

坂田 一瞬「アレ?」って思ったんですけど、でもしばらくして意図が理解できました。玉は具象的でもあり、抽象的でもある。まるで惑星や細胞みたいで、それらの集まりが世界を構成している。つまり、私たちと探っていた「どこでもない場所」がこういうものだったことに初めて気づきました。

南川 この作品って、いろんなフォーカスの方法を扱っているんだと思うんです。だから美術にしても、観客の位置によって見え方が変わったら面白い。最前列のひとは玉に見えただけ、奥の人は粒に見えた、とか。

—資生堂ギャラリーでの個展「たよりない現実、この世界の在りか」も、鑑賞者ごとに体験の性質が異なっているのもよくて、むしろ体験性が無数に並列している状況こそ現実なんじゃないか、という内容でしたね。

荒神 今回の舞台美術の元になった《R.G.B.D》は、夜中に眠れなくて天井を眺めていて思いついた作品なんです。天井が「ざわざわざわ……」と蠢いているように見えて、次第に赤と緑と青の3色の粒子の固まりに見えてきた。もしかしたら目に見える全てのものは、光の粒の集まりで、光の定着率の違いで宇宙は成り立っているんじゃないか、っていう想像がその時にわっと広がったんです。ですから坂田さんの気づいた感覚は、すごく馴染み深いものですね。

坂田 私も荒神さんの持っている感覚に共感することがとても多いです。小さい頃、音楽を始めたばかりでは楽譜が書けなくて、すごく静かな場所に籠っては耳を澄ませて音を探っていたんです。聴き覚えのある音が聴こえたら正解で、それをつないで曲を作るということをやっていた。今、演劇でやっているのも同じだなんて気がします。演劇って、自分のものではない言葉を喋るじゃないですか。死んでしまった人の、もう聴こえなくなってしまったけれど、どこかで発せられ続けている声を探ることが、私たちの仕事だと思うんです。作品のなかに登場する霊媒みたいですね。でも、私が世界に対して感じているものと、それはとても近いと思います。

たくさんのモノローグから

—現在、日本で通し稽古に取り組んでいるとのことですが、手応えはいかがですか。

坂田 ヤマ場に突入していますね。まだシーンを並べてみただけの段階で、これからどんどん作品が変わっていくと思います。

—既に決まっていたシーンの順番を組み替えたりすることはよくあるのでしょうか。

坂田 私の場合は必要です。演劇も音楽もタイムラインのアートだと思うんですけど、流れをどうつくるか、どこで切り札を使うか……そういう時間の流れのなかで勝負しているところがありますね。

荒神 美術の場合だと、完成したものを作品としているので、鑑賞者の反応だとか状況の変化に対して柔軟に対応できないことが多いんです。でも、今回は「こういうシーンを入れたい」「これはあえて見せない」といった風に演出の流れのなかで作品

を成立させるってことを初めてやっている。それがすごく楽しくて、いろんな挑戦をしています。失礼かもしれないですが、楽しい実験をやらせていただいている感じがあります。

南川 僕たち、宇都宮で《おじさんの顔が空に浮かぶ日》という参加型プロジェクトをやっているんですが、じつは坂田さんの演出方法にすごく影響を受けたんですよ(笑)。これまでは空間に向き合うことを優先したけれど、参加してくれる一人ひとりと、対話を重ねてもっと向き合うべきなんじゃないか、って。

坂田 じつは最初にジョージから提示されたプランでは、もっとドラマ色が強かったんです。でも、これは私の趣味でもあるのですが、声なき声……一人ひとりの人間のモノローグにじっと耳を澄ます時間が私は好きなんです。セリフのやり取りで面白おかしくすることもできるけど、個人とちゃんと向き合っ、じっくり話を聞くことを作品の柱にしたかった。それはパレスチナ滞在で得たことでもありますし、「目」の皆さんとの共同作業から発見したこともあります。

—「目」の資生堂の作品もそうでしたが、複数性を担保しつつ、体験そのものは個人的な領域に帰結するという点で、坂田さんと「目」の世界はつながっている気がします。大勢の人たちが一か所に集まって体験を共有するのが演劇の大きな特徴ですが、そこから一歩外に出ようとする試みが本作では見られる予感があります。本番を楽しみにしています。

(取材・文=島貴泰介)



さかた・ゆかり
1987年生まれ。演出家。幼少期より作曲を始め、YAMAHA Junior Original Concertに4度入選。東京藝術大学音楽環境創造科入学後、舞台演出を学び、在学中に川崎市アートセンター「BOMBSONG」(2008年)を演出、また、利賀演劇人コンクール、フェスティバル/トーキョー「演劇/大学09春」に参加した。大学卒業後は舞台技術スタッフとして働き、2012年より創作活動を再開した。



め
1wah documentのメンバー、南川憲二(ディレクター)と増井宏文(制作)が、荒神明香のアイデアを実現すべく2012年より始動。瀬戸内国際芸術祭2013に参加。鑑賞者の「目」を道連れに、まだ見ぬ世界の果てへと直感的に意識を運ぶ作品を構想する。2014年2月に「状況の配列」展(福岡・三疊地所アルティウム)開催、7月にその続編となる「たよりない現実、この世界の在りか」を資生堂ギャラリーで展開した。

CAST



アディーブ・サファディ Adeeb Safadi

占領下シリアのゴラン高原出身。肉体俳優。アル・カサバシアターのドラマアカデミーでアクトバット、殺陣、ステージバトル、フェンシングを教えている。チームをあたたく取りまとめるお兄さんの存在。2014年は生まれて初めて飛行機に乗って海外に行くことになっていたが、頓挫。ちょうどそのとき出演の声がかかり、念願叶って東京に行けることになった。



アタ・ナーセル Atta Nasser

占領下エルサレム出身。人懐っこくてとても顔が広い。2009年からペイトジャラのアル・ハラ劇団に4年間所属し、2014年フリーランスとして活動を始めた。空手でパレスチナを3回制覇したという小さな猛者。高い身体能力と鋭い直感を武器に、力強い演技を見せてくれる。普段は遊んでばかりいても、実は実力派。



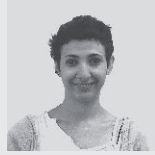
フサム・アル=アazza Husam Alazza

占領下ベツレヘムのペイト・ジブリン難民キャンプ出身。信条を貫く熱い男。俳優、演出家として幅広く活動を広げ、難民キャンプの子供たちのための「1シケルの演劇プロジェクト」に中心人物として関わっている。熟考を重ねて瞬発的に見せる彼の演技は、その名フサム(剣の刃)のような切れ味を持つ。「芥川は天才だ!」と尊敬している。



ヤスミン・カダマーニー Yasmin Qadmany

占領下シリアのゴラン高原出身。ミステリアスな魅力で男性陣を盛り上げてくれる。大学時代はシリアのダマスカスで建築を学び、その後も居住地を転々としながらさまざまな仕事を体験した。今、巡り会えた演劇は楽しく、日々発見に満ちている。女優として初めての仕事がこのプロジェクト。最初の出演が日本でとても喜んでいる。



シャムス・アッシー Shams Assi

占領下ナブルス出身。年頃になると女の子は外で遊ぶことを禁じられたため、妹と庭の木の下で銃撃、誘拐、レイプなどの過激なごっこ遊びを始め、次第にそれは人形を使った壮大な演劇に発展した。移動シネマのプロジェクトでは、ヘブロンなど西岸地区各地の都市や農村、難民キャンプを回った。シャムス(太陽)という名の通り、明るく開放的な性格で、恋多き乙女。



ヘンリー・アンドラーウイス Henry Andrawes

占領下タルシーハ出身。ハイファ在住。愛妻家。ハシャビという4人組アンサンブルを創設し、実験的なパレスチナ演劇に取り組む。個人でも舞台・映画俳優として国内外を問わず活躍している。人生初の舞台は小学校6年のとき「怒け者のハト」主演ハト役。役作りであまりに人が変わるので、妻からは「25人と結婚したみたい」と言われている。



ムアイヤド・A・サマド Muayad A.Samad

占領下ラマツラー近郊のスルダ村出身。お茶目な癒し系個性派俳優。ジョージからは「ブダ」というあだ名で呼ばれているらしい。ディスカッション中はいつも全体の流れを飛躍させる奇想天外なアイデアを出して驚かせてくれる。日本語を覚えるのが一番早く、ときどき格言が飛び出す。ダイエツ中。



パレスチナでの稲古中、キャストの一人アタ・ナーセルが描いたイラスト

アーティスティック・ディレクター：ジョージ・イブラヒム(アルカサバ・シアター)

演出：坂田ゆかり

美術：目

ドラマトウルク：長島 確

原作：芥川龍之介「羅生門」「藪の中」

参考：『羅生門』(脚本：黒澤明、橋本 忍)、

『Rashomon-A Drama in Two Acts』(Fay Kanin and Michael Kanin)

引用：マフムド・ダルウィーシュ『異邦人に馬を』

(四方田犬彦訳、[壁に描く]所収、書肆山田)

使用楽曲："Nijmet El-Subeh", "Inta Bne - Meen", "La Tetlaa"」

(from "Ishraq Reminiscence" by サーナー・ムサー)

出演：アディーブ・サファディ、アタ・ナーセル、ヘンリー・アンドラーウイス、

フサム・アル=アazza、ムアイヤド・A・サマド、シャムス・アッシー、

ヤスミン・カダマーニー

照明デザイン：ムアッス・ジュバ

選曲：ザーヘル・ラシュマーウイ

音響：相川 晶(有限会社サウンドワイズ)

音響操作：畠山慎一

振付：酒井幸菜

衣裳：藤谷香子(FAIFAI)

美術制作：櫻井駿介

美術制作スタッフ：牛山秋良、市川チユン、森屋亮正、小幡友夏、比企恵里花、

野地真隆、直林朋栄、吉田尚弘

技術監督：寅川英司

技術監督アシスタント：加藤由紀子

舞台監督：佐藤 豪

演出部：大久保遼

美術コーディネーター：中村友美

照明コーディネーター：佐々木真喜子(株式会社ファクター)

字幕：幕内 寛(舞台字幕/映像 まくうち)

アラビア語台本：ジョージ・イブラヒム(アルカサバ・シアター)

翻訳・通訳：橋本琴音、渡辺真帆

テクニカル通訳：山田規古

記録写真：石川 純

記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

制作：河合千佳、砂川史織

フロント運営：清賀未央

FITインターン：入江郁美、北村未来、山口将邦、福地沙綾、吉原早紀

企画：ジョージ・イブラヒム(アルカサバ・シアター)、フェスティバルトーカー

製作・主催：フェスティバルトーカー

Artistic Director: George Ibrahim (Al-Kasaba Theatre)

Direction: Yukari Sakata

Stage Design: Mé

Dramaturge: Kaku Nagashima

Based on "Rashomon" and "In A Grove" (Yabu no naka) by Ryunosuke Akutagawa

Also inspired by "Rashomon" (screenplay) by Akira Kurosawa, Shinobu Hashimoto;

"Rashomon" (play) by Fay Kanin, Michael Kanin

Quotation: "A horse for the stranger. To an Iraqi Poet"

by Mahmoud Darwish (translated by Inuhiko Yomota)

Songs: "Nijmet El-Subeh", "Inta Bne - Meen", "La Tetlaa"」

(from "Ishraq Reminiscence" by Sanaa Moussa)

Cast: Adeeb Safadi, Atta Nasser, Henry Andrawes, Husam Alazza,

Muayad A. Samad, Shams Assi, Yasmin Qadmany

Lighting: Mu'az Al Ju'beh

Music Selection: Zaher Rashmamy

Sound: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Sound Operation: Shinichi Hatakeyama

Choreography: Yukina Sakai

Costumes: Kyoko Fujitani (FAIFAI)

Stage Design Production: Shunsuke Sakurai

Stage Design Production Assistants: Akira Ushiyama, Zyun Ichikawa,

Mitsumasa Moriya, Yuka Obata, Erika Hiki, Masataka Nochi, Tomoe Naobayashi,

Naohiro Yoshida

Technical Manager: Eiji Torakawa

Assistant Technical Manager: Yukiko Kato

Stage Manager: Go Sato

Stage Assistant: Ryo Okubo

Stage Design Co-ordination: Tomomi Nakamura

Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)

Surtitles: Satoru Makuuchi

Arabic Script Adaptation: George Ibrahim (Al-Kasaba Theatre)

Translation, Interpretation: Kotone Hashimoto, Maho Watanabe

Technical Interpretation: Noriko Yamada

Photography: Jun Ishikawa

Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd.

Production Co-ordination: Chika Kawai, Shiori Sunagawa

Front of House: Mio Saiga

Interns: Ikumi Irie, Itsuka Kitamura, Nobukuni Yamaguchi, Saya Fukuchi,

Saki Yoshihara

Planning: George Ibrahim (Al-Kasaba Theatre), Festival/Tokyo

Produced and presented by Festival/Tokyo